

10月15日は「きのこの日」です

きのこの日は、きのこの消費拡大と生産振興を目的に、きのこのに対する正しい知識の普及、啓蒙活動を積極的に推進して、消費者にきのこの健康食品としての有用性や調理、利用方法の浸透を図るため、日本特用林産振興会によって制定されました。

きのこのは

きのこは、カビや酵母に近い仲間、普段は倒木や落ち葉、土の中などで菌糸として生活しています。皆さんが普段食べているきのこは、菌糸の集合体で、子孫を残すために必要な胞子を作る器官(子実体)になります。

近年の栽培状況

きのこの栽培方法には、きのこの菌糸を培養し、これを種菌として原木に植え付け、きのこを発生させる原木栽培と、おが粉などを固めたものに種菌を植え付け栽培施設内できのこを発生させる菌床栽培の、主に



原木栽培



菌床栽培

2つの方法があります。菌床栽培は施設内で季節や自然条件に関わらずきのこ栽培ができることから、徐々に普及し、以前は原木栽培の乾しいたげが主であったしいたげでも菌床栽培の生しいたげが一年中市場に

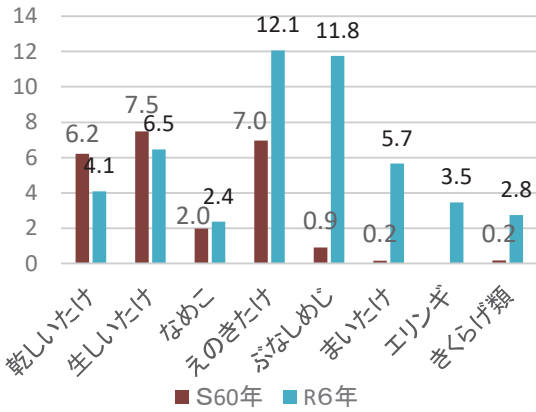
出回るようになりました。

きのこ類の全体の生産量は戦後年々増加し、昭和60年と令和6年度を比較すると約1.5倍になっていますが、近年は45万トン前後で推移しています。内訳をみると、

主に菌床栽培で生産されるぶなしめじ、えのきたけ、まいたけ、エリンギなどの生産量が横ばいで推移している一方、主に原木栽培で生産される乾しいたげの生産量は生

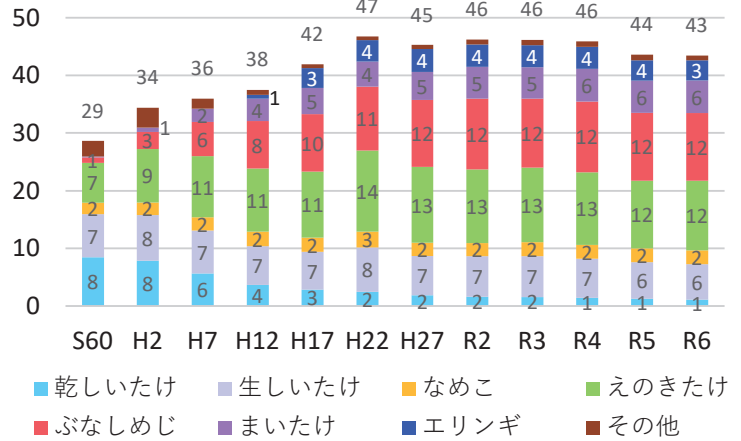


きのご類の消費量(万t)



林野庁「特用林産基礎資料」
乾しいたけ、きくらげ類は生重量換算値

きのご類の生産量(万t)



林野庁「特用林産基礎資料」
乾しいたけは生重量換算値

令和6年 都道府県別きのご生産量ランキング

	乾しいたけ	生しいたけ	なめこ	えのきたけ	ぶなしめじ	まいたけ	エリンギ
1	大分県 554t	徳島県 7,025t	新潟県 5,545t	長野県 71,068t	長野県 47,429t	新潟県 35,597t	長野県 14,822t
2	宮崎県 266t	岩手県 4,088t	長野県 5,029t	新潟県 18,364t	新潟県 22,650t	静岡県 4,889t	新潟県 11,726t
3	熊本県 147t	群馬県 3,981t	山形県 4,081t	宮崎県 x	福岡県 15,255t	福岡県 3,690t	広島県 x
4	岩手県 94t	福島県 3,871t	福島県 1,697t	福岡県 5,413t	香川県 5,111t	三重県 2,925t	福岡県 1,799t
5	愛媛県 71t	秋田県 3,590t	北海道 1,260t	北海道 x	富山県 x	長野県 2,479t	香川県 x

林野庁「特用林産基礎資料」
[X]個人又は法人その他の団体に関する秘密を保護するため、統計数値を公表しないもの

きのごこと里山林利用

産者の高齢化等により減少傾向にあります。きのご類の消費動向は昭和60年と比べると大きく変化しており、現在の消費量トップ3は、えのきたけ、ぶなしめじ、生しいたけとなっています。

また、きのごの主産地は、乾しいたけは大分県、生しいたけは徳島県が、その他のきのごは新潟県、長野県などになっています。

きのご原木となる広葉樹のコナラ、クヌギ等は、きのご生産に適する伐採適齢期があります。利用されず適齢期を過ぎ大径木となると、きのご原木に不向きとなるだけでなく、切り株から次世代の芽が生える萌芽更新がされにくくなり、将来の里山林の利用にも支障をきたします。

また、近年、カシノナガキウムシが媒介するナラ菌により、ナラ類、カシ類、シイ類が集団で枯損する「ナラ枯れ」が全国で発生しています。「ナラ枯れ」は高齢化した森林の大径木に多くみられることから、短い周期できのご原木を供給することにより森林を若返らせることは、この被害拡大を防止する意味で重要です。

加えて、比較的明るい里山林の環境を好むチョウ類などにとっては、里山林が放置され暗い環境の森林に変化することにより、その生息・生育環境が失われることとなります。このため、きのご原木利用などで里山林を明るい環境に維持していくこと

は、里山林特有の生物多様性の保全にも繋がります。



おわりに

きのごは年間を通じて価格が安定しているうえ、優れた栄養価や機能性を持っており、国民の生活に欠かせない食材です。需要の少ない春から夏の季節ばかりでなく、鍋がおいしい秋から冬の需要拡大も重要です。きのごを食べることは、森林の循環利用や山村地域の振興にも寄与しますので、本稿を通じて、きのごを身近に感じていただき、より一層きのごを日々の料理に使っていただくと幸いです。

